

マンザナ収容所関連資料を紐解く

—第5代院長 C.B.デフォレスト先生の第二次世界大戦終局期の活動—

藏中さやか

はじめに

神戸女学院「中興の祖」、第5代院長 C.B.デフォレスト先生（1879～1973）は大阪の川口居留地で宣教師家庭に生まれ、仙台で暮らした後、帰米して大学卒業後、宣教師として来日した。1905年神戸女学院の教師となり、1915年から院長を務めた。デフォレスト先生の人生は、生涯のすべてを他者に捧げたとも評される。

デフォレスト先生にかかわる資料は、学校法人神戸女学院および同窓会組織である公益社団法人めぐみ会の他、北米のハーバード大学ホートンライブラリー、スタンフォード大学フーバー研究所、スミス・カレッジ史料室等に分蔵されている。それらの資料をもとに詳しくデフォレスト先生の足跡を辿った書が竹中正夫先生の労作『C.B.デフォレストの生涯—美と愛の探求』（創元社 2003年、以下竹中著書と称する）である。その後、デフォレスト先生の書簡については学内研究が開始、継続され、成果報告が重ねられた^①。

分蔵される関係資料のうち、学校法人神戸女学院所蔵資料として史料室が保管するデフォレスト資料は、デフォレスト文書とも呼ばれ、その中にデフォレスト ファイルとされる一群の資料がある^②。史料室では1972年ごろから大きく4つに分類してファイリングし目録作成を進め、以後、その内容の一部を本誌にて目録という形で公表してきた。本誌号数順に一覧すると次の通りである。

Vol.19 岡田山関係、 Vol.20 Dedication 関係、 Vol.21 Music 関係、 Vol.23 Kasei-ka 関係、 Vol.25 Bazaar Data 関係、 Vol.26 Dormitory 関係、 Vol.29 Foreign Teaching Applications 関係、 Vol.35 English Play Contests etc.

これまで本誌 8 号分に一部のファイル内の細目を公開しているが、これらはデフォレスト資料中から選り分けたデフォレスト ファイルの一端であり、さらなる整理を待つ状態にある資料が他に多数ある。

本稿では、このデフォレスト ファイルのうち「(グループ 2)」に分類される資料から、第二次世界大戦終局から終戦後、すなわち 1944 年 6 月より 1945 年 12 月まで、デフォレスト先生が直接かかわった日系人の収容所であるカリフォルニア州のロサンゼルスに北方に位置するマンザナ収容所に関する資料について紹介する。関係資料は、強制退去と収容所管理にあたる WRA 関連の資料と、マンザナ収容所で発行された新聞とに二別され、さらにそれら以外の資料が加わる。資料整理は 1986 年ごろに行われたが、それぞれを年次順にファイルに収め、目次を付ける等の基礎作業に留まる。

1

1941 年 12 月の日米開戦の後、1942 年夏から 1943 年の間に、カリフォルニア州、オレゴン州等に在住する約 12 万人の日系人が米国籍取得の有無にかかわらず「敵性国人」として、1942 年 2 月 19 日発令の「大統領命令 9066 号」によりそれまで居住していた土地から強制退去の上、10 カ所の収容所に隔離された。収容所は乾燥した砂漠地帯や荒れ地に開設され、収容された人々は不自由で厳しい生活を強いられた。そのうちの一つがマンザナ収容所である。現在、収容所跡地は国立公園局が管理する国定史跡となり、HP や YouTube を通じてさまざまな資料の収集や情報公開等が行われ、バーチャルミュージアムが閲覧可能である (<https://www.nps.gov/manz/learn/historyculture/collections.htm>)。強制収容に対する補償運動や日系アメリカ人コミュニティについてしばしば論じられてきたが^③、最近では発掘調査や庭園の復元等が進められ、現地での暮らしそのものへの関心も高い^④。文学研究の側からは「もうひとつの『アンネの日記』」とカバーに記されるジャンヌ・ワカツキ・ヒューストン、ジェイムズ・D・ヒューストン、権寧訳『マンザナールよさらば—強制収容された日系少女の心の記録』(現代史研究会 1975 年)が収容体験と向きあう作品として知られ、収容者の

人生、そして家族や社会を考えさせる材料となっている^⑤。また写真家アンセル・アダムス、宮武東洋の写真からは、人々の暮らしが垣間見える^⑥。

日米開戦のため、帰米中であったデフォレスト先生は、このカリフォルニア州マンザナ日系人収容所で 1944 年 6 月から翌 1945 年 12 月の間、カウンセラーとして働いた。当時の活動については、竹中著書第 6 章「マンザナの日々」に詳細、克明に述べられる^⑦。竹中著書の「あとがき」には、デフォレスト先生の母校であるスミス・カレッジにデフォレスト文書三箱があり、「その一つには、一〇〇頁をこえるマンザナの記録がギッシリ入っていた」と記され、末尾の主要文献のⅡ原資料の中にもマンザナ関係の資料が載るが、第 6 章はこれらをもとに綴られている^⑧。

竹中著書によれば、デフォレスト先生は、親しい知人から日系人の収容所で日本語のわかるカウンセラーを求めていることを聞き、パサデナで 6 週間の研修を受けたあと、戦時転住局 (War Relocation Authority : WRA、1942 年 3 月開設) が運営するマンザナ収容所で暮らす人々の日常を助け、収容所が閉鎖されるまでの間、勤務した。当初はハーフ・タイム、後にはフル・タイムに近い形であったという。竹中著書は 1 年半のマンザナでの日々を詳しく紹介した後、デフォレスト先生の「マンザナの日々は、限られた時間と空間の中で、多くの異なった背景の人びとと生活を共にしながら、多様な奉仕活動に打ち込んだ独自の体験でありました」と述べる。

その後、学外の研究者である石井紀子が「太平洋戦争と来日アメリカ宣教師—シャーロット・B・デフォレストとマンザナー日系人収容所の場合」(『大妻比較文化』10 号、2009) を発表している。同論文は第二次世界大戦前後のデフォレスト先生の活動を勤務したマンザナの収容所での日々を中心に詳論したもので、デフォレスト先生の「マンザナー日記抄録」(Manzanar Journal Entry) という、「約 140 通、計 170 頁余にシングル・スペースのタイプ打ちされた資料」を用いた労作である。

2

ここで日系移民資料に目を向けると、国内のコレクションとしては国立国会図書館憲政資料室所蔵日系移民関係資料が知られ^⑨、一部が国立国会図書館デジタルコレクションでも公開される。また JICA 横浜海外移住資料館にも関係資料が所蔵され、和歌山市民図書館には移民資料室が設置され関係資料を収集する。神戸の海外移住と文化の交流センターは 1928 年設立の国立移民収容所を継承し、特にブラジル移住者に関する施設として現在も「希望と未知への船出の広場」(移住ミュージアム)という展示スペースをおいている。が、いずれもマンザナ収容所のみに重点を置くものではない。

WRA 関連資料は戦時中の「在米日系移民強制隔離の全容を明らかにする史料」として Chadwyck-Healey/ProQuest-US-がマイクロ資料“Records of the War Relocation Authority 戦時転住局文書”として集成する^⑩。同資料には

A. Field Basic Documentation, 1942-1946

収容所に関する基本史料・公式報告、新聞切り抜き、収容所内の新聞、書簡、各種報告書、組織表、公的・私的刊行物、スピーチ等。日系人コミュニティにおける強制移住に対する反応、一般市民の日本人に対する感情、収容所での日々の営み、収容者の法的問題、医療、教育、農業、安全等を伝える文書。

B. Headquarters Security : Classified General Files 1942-1946

収容所の治安維持に関する政府内文書 (アルファベット順)

C. Headquarters Subject : Classified General Files 1942-1946

WRA の機能と方針に関するあらゆる資料 (事項別)

が収められる^⑪。A を所蔵する早稲田大学図書館 HP 記載の内容紹介には「現地の収容所から WRA 本部に送られた、毎月の報告書・書簡・新聞記事などが含まれており、収容政策や収容所生活等の全貌を明らかにしようとするもの」と記される^⑫。

デフォレスト ファイル (グループ 2) の WRA に関する資料は次のファイル「1」～「6」である。

	ファイル名	点数
1	War Relation Authority	29
2	War Relation Authority Bulletins etc.	31
3	War Relation Authority (California)	48
4	War Relation Authority	33
5	War Relation Authority	26
6	Miscellaneous Papers Re Relocation and the War	44

それぞれにタイプ打ちの公文書や転住関係のパンフレット、手紙等を収める。資料の状態は良好で、公的な記録からは WRA の果たした役割や収容所の位置付けやその中での人々の日々の暮らしの維持管理等がうかがえる。また転住促進のためのパンフレット等には移民として暮らした人々が生きる土地の風土や特性が紹介され、生活はもちろんその当時の日系人の生き方そのものを現代に伝える資料となっている。今後、公開されている資料との照応等の作業を進め、その資料的価値を明確にする必要がある。

3

第二次世界大戦中、全米各地の集会所や強制収容所では、収容された日系アメリカ人によって新聞が発行されていた。アメリカ議会図書館のデジタルコレクション「日系アメリカ人強制収容所新聞 1942 年から 1946 年」の中にはマンザナで発行された新聞を「マンザナー・リロケーション・センター・アドミニストレーションの公式出版物とマンザナー・コミュニティ・エンタープライズの新聞」として 373 点を収める¹³⁾。

マンザナ収容所では、英語版、日本語版の新聞が発行されていた。同デジタルコレクションの解説には「1942 年 4 月 11 日、最初の排除命令から 1 ヶ月も経たないうちに、マンザナー・フリー・プレスはカリフォルニア州インヨー郡のマンザナー・リロケーション・センターで出版を開始した」とあり、マンザナで発行された新聞は収容所で刊行された新聞として最初のものであったこと

が記されている。

ファイル「9」～「14」には、デフォレスト先生が現地で収集し本学に託した日英両版のマンザナ収容所で発行された新聞 Manzanar Free Press (英語版)、フリープレス (日本語版) が保管されている。所蔵状況は以下の通りである。

・ 英語版

	ファイル名	点数	内容
9	Manzanar Free Press I	42	Vol.5, No.51～No.52 (June 24.1944～June 28.1944)、Vol.6, No.1～No.40 (July 1.1944～November11.1944)
10	Manzanar Free Press II	50	Vol.6, No.41～No.90 (November 15.1944～May 2.1945)
11	Manzanar Free Press III	40	Vol.6 No.91～No.107 (May 5.1945～June 30.1945)、Vol.7, No.1～No.13 (July 4.1945～August 18.1945)、Vol.15 No.7, No.21 (September 1, 5 1945)、Vol.16 No.1～7 (September 8～October19, 1945) と Red Cross 1944 April 1 点

タイプ打ち印刷物とタブロイド版とが隔号で刊行され、法量はそれぞれ一紙 35.5×21.5 cm、40.5×28.0 cm である。

Manzanar Free Press I の Vol.5, No.52 (June 28. 1944) には“D^E F^ORE^ST AUGMENTS WELFARE STAFF”という見出しでデフォレスト先生の紹介記事が載る。その全文は以下の通りである。

Charlotte B. DeForest has been added to the community welfare staff as junior counselor, revealed the welfare section. Her job will consist of interviewing and counseling evacuees and their families to help formulate future plans.

Daughter of a missionary, Miss DeForest was born and reared in Osaka, Japan.

After teaching for ten years on the faculty of the Kobe College for Girls, she served as president of the institution for 25years.

REASON OF RETURN

Due to serious illness, she returned to the United States in 1940. Until her appointment here, she has spent much of her time doing translating and interpreting work for the Immigration Service in Boston, Mass., and teaching the Japanese language at a army service training unit.

She has met many of her old friends of Japan in Manzanar, and looks forward to her stay here with great pleasure.

・日本語版

	ファイル名	点数	内容〔〕内は欠号
12	フリープレス I	32	第 5 版 48、49、51 号（1944.6.21、6.24、7.1）、 第 6 版 2～30 号（1944.7. 5～10.11）とルイジ アナ州ニューヨーク州就職口
13	フリープレス II	45	第 6 版 31～50 号〔内 42 号欠〕（1944.10.14～ 12.23）、新年特別号（1945.1.1）、52～88 号 〔54、56、57、61、63、69～72、75、77、79 号 欠〕（1945.1.6～5.12）とマンザナ再転住部報 1- 1-4
14	フリープレス III	33	第 6 版 89～102 号〔内 99 号欠〕（1945.5.16～ 6.30）、第 7 版 1～20 号〔内 13 号欠〕（1945.7.4～ 9.8）「産業界へノ躍進 企業ト就職ノ好機 会」、Manzanar Red Cross（1944.4.15）

日本語版は、ガリ版刷両面印刷でほぼ 4 日ごとに刊行され 1 号につき 2 枚、法量は一紙 35.5×21.5 cm、Ⅲの 194 号以降 30.2×22.8 cmである。

同紙のデフォレスト先生にかかわる記事は以下の通りである^④。

- 1) 見出し「タウンホール、ニュース」（フリープレス I 所収の第 6 版 10 号 1944.8.2 発行）

去る火曜日、区支配人及び日本語教師達集会の席上、アダムス夫人はセンターでの日本語教授法則に就いて説明した。

八月一日より日本語の個人教授及び区主催の日本語学校は一切許されぬ。現在の教師及び生徒は直ちにタウンホールか教育部で登録せねばならぬ。

以後日本語教授は曾て神戸女学院の教師であつた、デフォレスト博士監督下に行はれる。

2) 見出し「デフォーレスト嬢の希望」(フリープレス I 所収の第 6 版 30 号 1944.10.11 発行)

当マンザナ社会部(一〜四〜三)のデフォーレスト嬢は日本生れで、教師として在日三十五年、米国育ちの二世や在米生活の長い一世が恐入るような日本語を使はれる。このデフォーレスト嬢は、同志社女学部、大坂梅花女学校、神戸女学院、松山女学校等の学校に曾て^(ママ)学び或は卒業生が当マンザナ住民の皆様の中にあるならば、是非お目にかゝつてみたいと希望してゐる。

日本語版には、現地での生活情報や転住にかかわる記事の他に、日本のできごとや戦局を報じる記事も多く、どのような情報が現地にもたらされていたのかを如実に知ることができる。例えば、終戦後の第 7 版 20 号 1945.September.8 には「帝国第八十八臨時議会開かる」の見出しで、9 月 4 日開会の帝国議会の記事が載り、「廣島の惨状」の見出しで「クラク、リー」という名を付した広島への原爆投下に関連する記事が載る。現地の生活情報に加え、英字紙の翻訳による政治、社会に関連する時事問題の報道の分析等も含めた今後の研究がまたれる。

さらに関連する資料を収める「15」「16」のファイルがあり、その内容は次の通り整理されている。

15 Manzanar Programs etc. 75 点

書類 (26.5×20.0 cm、27.5×21.5 cm、28.0×21.5 cm)、他メモ、チラシあり

16 Church Programs and Reports Manzanar 32 点

書類 (28.0×21.5 cm)、パンフレット (27.5×21.5 cm)、週報 (35.5×21.5 cm)

「15」には 1945 年 6 月 2 日開催のマンザナ高校の卒業式のプログラムやコミュニティで 1945 年 4 月 20 日に開催されたスピーチコンテスト、1944 年 11 月 24, 25 日に開催された「日本演芸の夕」という催しのプログラム、1945 年の MANZANAR RED CROSS の刊行物、1945 年 4 月 29 日にマンザナ公会堂で開催された追悼会の次第の他、EDUCATION SECTION SUMMARY や 1944 年夏の ACTIVITIES PROGRAM 等が含まれる。

「16」はマンザナ基督教会の活動にかかわるものを一括したファイルで、1944 年 9 月から翌年の 10 月までの Church Program 8 点や 1945 年の週報 3 点、1944 年から 1945 年の会計報告 6 点等を含む。

いずれも保存状態は良好で、当時の日常や信仰を守った人々の姿を伝える資料である。

まとめ

本稿では、デフォレスト ファイル (グループ 2) よりその内容の一部を紹介した。いずれも貴重な資料であり、資料精査を含む学内研究の開始と今後の関連研究分野の進展が待たれる状況にある。日英両版の“Manzanar Free Press”はもちろんであるが、現地の教会活動、教育活動を伝える資料等、マンザナ収容所が閉所するまでの日々を追うことのできる豊かな情報の資料的価値は極めて高い。このうち日本語版である『フリースプレス』については、現在公開準備を進めている神戸女学院デジタルアーカイブズ (仮称) に収録し公開する予定である。

第二次世界大戦終戦から時が経ち、世界の中の日本を巡る状況も折々に変容している。日米の間で平和を希求し続けた第 5 代院長デフォレスト先生の志と活動とを今に伝え、その想いを今一度胸に刻みたい。

註

- ① 津上智実編『C.B. デフォレスト書簡の解説』I-VIII、神戸女学院大学「宣教師文書」

研究会、2016-2022。

- ② デフォレスト文書、デフォレスト資料は同意に用いられ、デフォレスト ファイルは史料室において特に区分してファイルに収めた資料群を指す。
- ③ 岡部一明『日系アメリカ人強制収容から戦後補償へ』（岩波ブックレットNo.284 1991年12月）、竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティー強制収容と補償運動による変遷』（東京大学出版会 1994年）等参照。
- ④ 秋山かおり「マンザナー国定史跡日本庭園の復元プロジェクトから知る日系人抑留者の暮らし」（『立命館言語文化研究』35（2）、2024年1月）参照。
- ⑤ 松原美恵「日系アメリカ文学（戦後…本土）―表象としてのマンザナールをめぐって」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』（世界思想社 2011年）等参照。
- ⑥ 映画『東洋宮武が覗いた時代』（2008年製作）、「カリフォルニア州が謝罪した日系人強制収容所「マンザナー」と移民」（<https://globe.asahi.com/article/13249096>）参照。
- ⑦ その内容は NHK アナログ教育「こころの時代～宗教・人生」の「国籍は天にあり」（2006年12月24日放映）でも取り上げられた。
- ⑧ 本誌第37号掲載の「竹中正夫のC.B.デフォレスト研究を顧みて」にてご令室竹中百合子様が竹中正夫先生のデフォレスト研究とその調査についての詳細を記されている。
- ⑨ <https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/emigration/>参照。
- ⑩ その原本は National Archives and Records Administration が所蔵する。
- ⑪ 紀伊國屋書店「Records of the War Relocation Authority について」<https://www.kinokuniya.co.jp/03f/denhan/umimicro/war.htm>より引用。
- ⑫ <https://www.wul.waseda.ac.jp/CLIB/MICRO/tenjyu.html>より引用。
- ⑬ <https://www.loc.gov/collections/japanese-american-internment-camp-newspapers/about-this-collection/>参照。なお米国議会図書館が所蔵する日系人の収容所で発行された新聞をマイクロ資料とし収録する「Japanese-American Relocation Camp Newspapers: Perspectives on Day-to-Day Life 日系アメリカ人収容所発行新聞集成」（センゲージラーニング株式会社 Gale 事業部）もある。
- ⑭ 英語版、日本語版に計3カ所のデフォレスト先生関係記事が載るが、いずれの箇所にも資料整理時のものと思われる付箋、葉が残る。

〔付記〕資料点数の確認には佐伯裕加恵氏のご助力を得た。記して感謝申し上げる。

（大学図書館（史料室）長）